

Luce e Silenzio — 吉田焼とイタリア、美が人を慰める物語

～静けさの白と、自由の色彩が会えるとき～

文・構想 デローラ多加子

一 はじまりの記憶

若い頃、生活は楽ではなかった。

母子家庭で、心にも少し影がさしていた。

そんなとき、幼い娘を連れて、ある雑貨屋に入った。

そこで、ひとつのイタリア製のコーヒーカップに心を奪われた。

明るいチューリップの絵が自由に踊り、

まるで陽の光を手のひらで包むようだった。

高価で、贅沢だとわかっていた。

それでもどうしても欲しかった。

それは“もの”ではなく、希望のかたちだったからだ。

一方で、私がティーンエイジャーだった時、私の母は友人とともに、高価な有田焼ではなく、日の目をみない未完成の蔵入りの器ではあったが、収集を楽しむ人だった。

葡萄の葉の形をした受け皿、

内にも外にも絵を描いた湯呑み。

完璧ではないけれど、どれも手の温もりが残っていた。

のちに知ったことだが、葡萄は聖書の中で“繁栄”の象徴とされている。

母が無意識のうちに選んでいたその模様には、

静かに祝福の意味が宿っていたのだと思う。

そうした器に囲まれて育った私は、

「美とは、人の手の跡を感じる事」だと自然に学んだ。

二 静けさと自由の対話

イタリアの器は、光と情熱の国の子。

自由で、のびやかで、命の鼓動を描いている。

吉田焼は、白の中に息づく静けさ。
光を吸い、沈黙の中で形を磨く。

この二つが出会うとき、
生まれるのは「静寂の中の歓び」。

白磁の余白に、明るい筆の一筆が走る。
そこには、東洋の沈黙と、西洋の歌が同居する。

「美とは、国を越えて人を慰めるもの」
それが、このプロジェクトの根に流れる思想である。

三 Luce e Silenzio — 光と静けさ

この構想の名を、
イタリア語で「Luce e Silenzio（光と静けさ）」と呼ぶ。

光は、イタリアの自由と色彩。
静けさは、吉田焼の白磁の世界。

光が静けさに触れ、
静けさが光を抱きしめるとき、
そこに人の心を慰める美が生まれる。

四 制作と出会い

イタリアから陶芸家を招き、
吉田の土と釉薬で、共同制作を行う。
白磁の器に、明るい線や花を描く。

現場はオープンスタジオとして開放し、
市民や学生が制作の息づかいを見つめる。
それは“ものづくり”を超えた、文化の対話になるだろう。

五 作品のテーマ

Tulip's Memory（チューリップの記憶）
若き日の希望の象徴。白磁に一輪の花を。

Vite（葡萄の記憶）
母の愛と、静かな時間を。葉の皿に絵付けを。

Silenzio di Luce（光の静寂）

白磁に青釉が溶け込み、湯気のように光る。

Respiro（息づく器）

指の跡を残し、手で包みたくなる形に。

六 美が人を慰めるということ

このプロジェクトは、
単に新しいデザインを生む試みではない。

それは、「苦しみの中でも、美を愛することをやめなかった」
ひとりの女性の祈りから始まった物語である。

イタリアの陽光と、日本の静けさ。
その交わりの中に、人間の尊厳と希望がある。

美は人を慰める。
そして、その慰めの中から文化が生まれる。

七 あとがき

嬉野の山に吹く風は、やわらかい。
土は静かに湿り、光を受けて白く輝く。

もしこの地に、新しい美が芽生えるなら、
それは誰かが“美を信じる心”を失わなかったからだろう。

その心こそが、未来を照らす光となる。

✨ 完